

岩手県の南東部、三陸の漁場とリアス式海岸に沿って位置する釜石市。近代製鉄業発祥の地として最盛期の人口は 9 万人を超えることもあったが、製鉄所高炉の休止に伴い人口が減少している。平成 23 年 3 月 11 日に発生した地震から津波が起こり、大槌湾、両石湾、釜石湾、唐丹湾に面する地域は壊滅的な被害を受けた。

釜石港湾口防波堤は、明治 29 年 6 月 15 日に発生した明治三陸海岸大津波（高さ約 8m）を想定して設計、着工から約 30 年を経て平成 21 年 3 月に完成した世界最深の大規模防波堤だが、対応しきれないレベルを超えた津波に破壊された。両石町は 18.5m、鶴住居町 14.4m と、リアス式海岸の沿岸部はそれぞれに高い津波浸水高を記録している。

大槌湾に面した鶴住居地区は、津波で 7 割近い建物、市の被災全体の 4 割に上る約 1800 戸が被災したが、釜石東中学校の生徒が鶴住居小学校児童の手を引いて逃げ、約 570 人全員が無事避難できた。

釜石市の平成 23 年 10 月 5 日現在の死亡者 884 人、行方不明者 194 人、住宅・建物被害（全壊数＋半壊数）3727（岩手県ホームページのデータより引用）。

● 荒井さんの場合（沿岸部・両石）

個人宅で避難者を受け入れ

当日はひとりで自宅に居た。最初はあまり強い地震とは感じなかったが、すぐに近所の人たちに声を掛けて山の中腹まで避難した。道の途中にある小さなパン屋で、あるだけのパンを買った。坂の道から海を眺めたら防波堤を越える津波が見えた。私は地震が起きたら家族のことを心配して自宅に留まるより、まず自分が高い所に逃げるのが当然と教えられてきたので、家族はそれぞれに逃げてくれたらと思う。消防団の人の指示で、そこからさらに上に逃げた。

津波の襲来が収まると道路が通行不能になった。逃げる途中にあった 2 軒の民家が避難者を受け入れてくれた。1 軒に 70 人から 80 人の人間が 2 日の間お世話になった。そこでおにぎりを炊き出しして頂き、寝具も用意してくれた。2 日間ほど孤立状態だったが、閉ざされた道がやっと通れるようになり、国道に下りて女遊部の避難所に向かった。そこで 250 人ほどの近隣の人たちと合流した。2 日間その避難所に居て、その後釜石市の体育館に全員が移動した。避難所では、誰が言い出す訳でもなく、自発的に炊き出しが始まった。私はその避難所で 4 ヶ月間炊き出しをした。今は仮設住宅で暮らしている。私たちは食べ物には困らなかった。いろいろな方にお世話になったことを感謝している。

避難訓練の大切さ痛感

今まで地域内では防災や津波のことなどについて日常的に会話していたし、避難訓

練もやっていた。しかし、まだまだ防災への認識が甘かったと思う。訓練していても、実際はどんな状況になるのか予測できないが、訓練は大事だ。避難訓練に積極的に参加していたのに亡くなってしまった人もいる。震災の炊き出し支援は、婦人消防クラブ（以下婦防）だけでなく地域のみんなで協力し合い、助け合えた。そのこと事は良かったと思う。

お世話になった感謝を忘れない

今回の震災では、多くの人々や団体にお世話になった。「そのご恩は決して忘れないようにしようね」と、婦防仲間で話している。

クラブの再結成は・・・

今は会員がバラバラな状態、広範囲に散らばってしまったので今後どうなるかわからない。連絡が取れない人もいる。しかし、地域の復興次第だと思う。仮設住まいなのでどのように再結成していくのが課題だ。

● 前川さんの場合（沿岸部・尾崎白浜）

津波の伝承を大事に守る

地元で育ち、地元で漁師と家庭を持った。夫も息子も消防団員。明治 29 年の三陸海岸大津波で亡くなった人の慰霊碑が地区内にある。そこで毎年慰霊祭をして、津波のことを語り継いでいる。婦防は全戸加入が原則。住民のほとんどが漁協組合、消防団、町会などに同じように入っているので一体化した組織体だ。有事の時のそれぞれの役割と、不在だった場合の代役など、細部にいたるまでみんなと話し合っていた。災害が起きたらまず自分の家で米を炊き、おにぎりを持ち寄ることも打ち合わせ済みだった。立地環境からすればもっと被害が大きかっただろうが、死者が少なく済んだのは「ここまで波は来ない。大丈夫だ」と思って家に残った人がいなかった事が、幸いしたと思う。声を掛け合い全員が逃げた。私は子どもの頃にチリ地震（昭和 35 年 5 月 24 日）を体験しているので、日常的にも避難準備は怠りない生活をしている。

発生当日の午前中、私は牡蠣養殖の手入れをしていた。午前中は浜に出て仕事をしている人も多い。1 時頃に帰宅して、昼食を取るために家族全員が家に居た。海や浜に出ている午前中、あるいは夜間で寝ている時の津波ではなかったこと、家族で昼休みを取っていた時間帯だったことも、災いの量を少なくしたのではなかろうか。

「てんでんこ」で即、逃げる

私が台所に立った途端、すごい揺れが来た。庭に出るとシーンと静かだった。83 歳の姑は「ここまで来ないから・・・」と、庭でのんびり洗濯物を取り込んでいたが、「とんでもないよ」と言い、長靴を渡して履かせた。嫁にも「速く逃げろ！」と声をかけ

た。避難所の小学校へは通常の道を通らず「裏の畑を越えていけ」と嫁に伝え、嫁は子どもをおんぶ紐で背負って逃げた。

消防団員として飛び出していく息子に思わず、「自分のことを大事にしろよ！ てんでんこ（「自分それぞれ」の意味）だぞ」と声を掛けていた。

避難袋に新しく追加しようと思っていた物は、やはり慌てていたのだろうか忘れてしまったが、常備の避難袋は持ち出した。避難時に車を使うのはダメだと分かっていたが、道に車は1台も走っていなかったので車に乗って自宅を出た。車のカギは常に同じ所に置くようにしている。

小学校の避難所に到着した時、人はあまり集まっていなかった。私の避難は早かった。地区の人は自力で逃げられる人がほとんど。高齢で足が弱い人のことが気になったけれど、消防隊では「まず自分・そして家族・次に地域を守れ」と教えられていたので、そこに留まった。近所の人たちがいるかどうか確認している時に、再びすごい揺れがきた。寒かった。小学校は高台なので下の海が見えた。通常の高台の時には防波堤上にバシャン〜バシャンと波が当たり飛び散るのだが、今回は黒く大きいものがこのこと現われ、スローモーションのようにゆっくりと防波堤を越えてきた。「えっー」と思ったら、海の上の船がおもちゃのようにパカパカと次々にひっくり返った。女性たちは「あー」と泣き出した。下の消防屯所が波でふわっと揺れるのが見えた。自宅は近い。「ああ、自分の家もだめだな」と思った。夕方になってきたので炊き出しの準備に入った。消防団員も集まってきた。

持ち寄りの食材で炊き出し

近くに商店はない。住民が米や乾麺、味噌醤油などの食材を「使って・・・」と持ち寄ってきた。山の沢水を使い、プロパンや卓上ガスボンベで調理。発電機も持ち寄った。学校の体育館には毛布などの備蓄があった。次の日は班を結成し役割と当番を定め、今後の避難所生活をどのように維持するかを話し合った。

学校の給食室に集まった食材は豊富だった。浜のストッカーが停電になったので冷凍食材の提供もあった。カレーは具沢山の豪華版。3食温かい食事を食べることができた。後で聞いたら他の避難所ではひもじい思いをしたとのこと。4日目になると米が不足してきたので「おにぎりは、小さく握ってよ」と指示を出した。5日目には自衛隊の支援が来たので、ホッとした。

逃げる時間はあったのに・・・

私たちは自分の暮らす地区は危険地域だと認識し、常日頃から防災意識を喚起し合っていたと思う。世間では99%大地震が近く起こると言われていた。防災マップも配布されていた。街の人たちも地震が起きてすぐに逃げれば、助かったかもしれない。あの地震から津波まで時間があったのに、なんで逃げなかったのか、と思う。

コミュニケーションは難しい

避難当初、地域の人たちのコミュニケーションは活発だったが、それぞれの事情が出てきて少しぎくしゃくしてきた。同居する家族を亡くしていたら、私もこのような座談会に出て発言などできない。家族を亡くした人に対し、時間が経つにつれて会話がスムーズに運ばなくなった。

避難所では何度も話し合いをした。情報がきちんと行き届かないために、正確に理解せず齟齬が生まれることも多い。様々なトラブルも生じたが、やはり話し合いが大事だと思った。こちらも余裕がなく一杯一杯だった。70人くらいの人数をリーダーとしてまとめていくことに多少の自信があったが、そんな自負は、はじけた。私の直裁な発言は自分なりに反省しているが、心理カウンセラーから「あなたが悪いのではなく災害が元凶なのだ」と言われ、救われたこともある。

現在、自宅は流されたし、漁業の仕事に戻れるかどうかの心配やさまざまな不安を抱えている。地元の人が同じ仮設住宅暮らしなので、それは良かったと思う。4畳半2間の仮設は夫婦2人ならいいけれど、息子家族も一緒なので正直住みやすいとは言えない。

行事化していた避難訓練

震災の前の3月3日に避難訓練があったが、最近は行事化している。集まりも悪いし参加人数のカウントをして「今日は、どうもご苦労さん」とジュースもらって終わり。町内会長も市の職員の対応も同じようなものだ。情報提供や講話もない事が通常化していた。

私は防災や災害避難に関しての勉強会やシンポジウムに積極的に参加してきたが、出席する人はいつも限定されてしまう。時給で働いている人に「出て」と強く言えないので、自分や役員などの同じ顔ぶれが出るが続いていた。反省として、勉強の機会は均等にしなければ意識は育たない。これからは他の隊員や若手が勉強会やイベントに出るように後押しをしようと思っている。

防災は万全を期す

災害が「明日起きてもおかしくない」と言われていたので、私たちは自主的に地域の防災避難マップや独居高齢者、そして弱者対応のための情報マップを作りつつあった。私は、これから「防災への心構え」をもっと徹底して啓蒙したい。映像や写真で記録を残して後世に伝えたい。「1000年に1度の大地震」と言われるが、すぐに起こるかもしれない。ライフラインの普及も大事だが、命を救うことが一番大事だと考える。そして防災意識が本当に根付くことが不可欠と思う。

協力隊活動の意義を確認

婦防活動は大切だ。地域住民なら入会原則なので旧来の関係が引き続くことへの問題もないわけではないが、コミュニティの絆が今回の活動では生きた。良かったと思う。

● 松本さんの場合（沿岸部・両石地区）

自宅が流れるのを目撃

地震当日、私は税金申告で街に来ていた。地震が発生したので手続きの途中だったが、建物の外に出る。駐車場の車がグラグラ揺れていた。いとこの奥さんと一緒に車で10分ほどの自宅に向かった。信号のストップはなかった（停電）ので、順調に帰宅できた。

「津波が来たら船は諦めて逃げよう」と、夫とは常に話していた。砂嵐のような、台風の時のような大きな音がした。それが津波の第1波だった。我が家の山手には神社がある。そこに避難しようと何も持たずに逃げた。その時はいつもの避難のように2～3時間くらいで収まるだろうと思っていた。高台の神社から近所の家、そして自宅がゆっくりと波に乗って流れていく様子が、見えた。

義妹は以前、「津波が来てもここ（実家）は安全だから大切な書類を預かって」と、我が家の奥座敷に権利書などの書類などを置いていたが、それも全部流れてしまった。地区内250軒のほとんどが壊滅、45人が死んだ。私の実家の地域でも「ここまでは津波は来ないだろう」と思って逃げ遅れた5人が、亡くなった。

本当かどうか私にはわからないけれど「釜石港に湾口防波堤が出来たために海流の流れが変化し、両石港の方に津波が来たのだ」とのうわさが、ささやかれている。神社には3日間居た。そこには備蓄の食料があったので80人分の炊き出しにはストーブを使った。4日目から自衛隊の支援が始まった。

避難所被災者にユーモアの声掛け

私は近くの避難所に移動してからも炊き出しを続けた。避難所被災者は何も手伝わず、まったく動かない人もいる。私はニコニコ笑顔で笑い掛けながら、彼らに「ここで、ぞうきん遊んでいるよ・・・」と声を掛ける。こんな時はユーモアが大事だと思う。自分たちで食材を賄い、何とか避難所生活を維持してきたが「この避難所は自主的に活動している」と判断されたのか、行政の支援が入らなかったのは少し不満だ。

命の替わりはない

避難集合の場所（広場）指定はあっても、設備が整っている避難所（建物）ではなく、単に地域住民の集合場所でしかない所もある。建物を建てる土地もないのが実情だが、今後は避難場所には屋根のある施設と寝具などの備品、炊き出し設備を備えて欲しい。

昔からの言い伝えでは「津波の時は家の玄関や窓を開け放して逃げろ。そうすれば波が家の中を通過して家屋だけは残るから」と教えられていた。上の方に住んでいても、消防団員なので水門を閉めに下に降りて死んでしまった人もいる。痛ましい。水

門の数が多いのにも、それに対処する人の数が少なくなっている現状も影響したのでは、と思う。

津波襲来後の景色は地獄絵だった。家は跡形もない。呆然とした。未だに自分の家が流されたことはよく理解できてないが、流された近所の家の前で黙祷をしている人などを見ると涙が出てくる。大切な書類は再発行できる。品物も買える。しかし命は再発行もできないし、買うこともできない。

子どもたちの防災意識と避難教育は適切だった。釜石東小学校生の手を引いて鶴居住中学校生が逃げたという話に、私たちは感動した。

今は仮設住宅に住んでいる。同じ地域の人たちが同じ仮設に入れたのは良かったが、震災のストレスで「うつ症状」になる人もいる。4畳半2間は、なんだか住みにくい。

生活自体が助け合い

震災避難の活動は、地域の「共助の精神」が生き残った結果だ。自衛隊などの支援が入って助けてもらったが、その前に地元の人達の顔・名前を知っていて支援できるのは、我々クラブ員だからこそと思う。漁業・農業・林業などの自分たちの生業（なりわい）がみんな一緒の地域、生活自体が助け合いで成り立ち、生きているのだから。

●原さんの場合（沿岸部・新浜町）

ペットを抱いて逃げた

震災前の3月9日にも地震があった。夫や娘の家族には何かあった時は浜町の神社に逃げよう、義姉の家が神社の近くの高台に住んでいるから、そこを頼ろうと話合っていた。地震発生時は、ちょうど夫が帰宅した時だった。「これは・・・津波がくるぞ」と消防団員の夫は、すぐに家を出た。

我が家ではペット（犬とウサギ）のためにペットフードやシートと水などのペット用品を、まさかの時のためにリュックサックにまとめていた。私は着の身着のまま、ペットを抱きリュックサックを背負って逃げた。夫と娘のことが心配だった。最初に受け入れてくれた近くの個人宅で炊き出しがあった。

夫は水門を3ヵ所締めてから、徒歩で町内に誰か残っていないかと避難誘導していたそうだ。第2波で海水が来たので泳いで安全な所まで逃げた。次の日の午後に夫と会えた。娘も、勤め先の上司が「あと10分待ってから車で出る」との助言のお陰で、助かった。高台の義姉の家でペットを一端預けて避難所に向かった。3日目に自衛隊の支援部隊が到着した。

避難所はペットの受け入れはしないので、すぐに風呂もないアパートを借りて避難した。ペットのウサギは、寒さや環境の変化に耐え難いデリケートな動物だ。私はずっと胸に抱いていたが、9日目に死んだ。アパートでの避難生活で犬の存在は本当に救われた。避難所ではペットは飼い主と離れて、貰い手募集の場所に移動される。可

愛らしいペットは直ぐに新しい飼い主に引き取られていくが、そうでもないペットはどうしただろうか。なんだか悲しい。

在宅避難者への支援不足

在宅避難者には当初、情報が入ってこなかった。支援物資も届かない。しかし知人や近所の人たちに衣類から食器までさまざまなものを提供して頂き助けてもらった。自分のためには涙を流さないと決めていたのに、見知らぬ人が「ここに被災された人が居ると聞いて来た」と言って、マーガレット 1 輪とガラスのコップとトマト 1 個をアパートに届けてくれた。電気もつかない時、慰められてどっと涙が流れた。今は、お礼の意味で町内の花壇の手入れなど、自分に出来ることはやっている。

避難準備は行っていた

津波は近いうちにやってくるだろうが「2 階なら大丈夫」と思っていた人が多い。年寄りたちは昭和 8 年の津波の体験があるにも関わらず「ここまでは来ない」と頑固だった。協力隊では、防災のために住民にアンケート（健康状態とか避難訓練への誘導も含めたもの）実施の準備中だった。空き家があればそこを避難所にするとか、いろいろと考えていた。個人情報取扱いの問題はあるが、まずは住民の確実な情報を得て、万全を期したいと思っていたのだ。そんな最中に、今回の震災にあってしまった。

私は平成 22 年 11 月に開催された地震のシンポジウムに参加していたので、津波のことは理解していた。地域住民には独居の高齢者も多いので、防災意識を持ってもらうこと、逃げる時はお隣にも声を必ず掛けることなどの情報を提供していた。しかし避難訓練しても参加率は少ない。訓練が必要な人が参加してくれない状況だった。90 歳と 85 歳の夫婦と一緒に逃げてくれた人が、後で「あの時はもう足元まで水が来ていたんだよ」と言ったら夫婦は驚いたようだ。津波から逃げる時には、後ろを振り返らず、夢中で逃げなければならない。

男性の地域意識を高めたい

地域在住の男性の地域に対する意識は、女性と比較して低い。サラリーマンが増えてきたことで、男性は地域から浮き上がっている。男性の意識向上と協力が望まれる。消防団員の夫は、地域の人のことを把握している。10 代と 80 代の間では避難所までの時間が違う、ということまで熟知している。名前と顔が一致しているのだ。男性で動けるのは、地域の団体に属している人だ。その人たちは自宅が流されたにもかかわらず、沢の水を引き込む工事などさまざまなことをしてくれた。自分のことでは泣かないようにしているが、家族を亡くした方だと聞くと、もう話かけることを躊躇してしまう。

外国からの支援もありがたかった。他の地域からも様々な形で助けていただいた。「何かあった場合には互いに助け合うこと、元気に前向きに復興していく姿を見てもらうのが恩返しのひとつ」と、夫と話している。

婦防参加の減少が心配

婦防活動に参加する人が高齢化などもあって年々少なくなっている。また登録されているのに、自分が隊員であることを認識していない人もいる。意識喚起のチラシを配布しようと計画していたところだ。誘っても「忙しい、仕事がある」と言われると、それ以上は勧められないのが現実。

● 川崎さんの場合（内陸部・鶴住居）

続々と避難者がやってきた

午前中は市役所にパート勤務している。自宅は山間部だ。ちょうど帰宅した時に地震が発生した。この地域は津波の心配はない。舅と姑を家の中の安全な場所に誘導し落ち着かせているうちに、電気が切れた。各戸にある防災無線も切れて全く情報がなかった。静かな中にドーンドーンと雷のような大きな音がした。

夕方になると下から車で続々と避難者が来た。集会場に行ったら「家が流された」とか「屋根が川の中で大変だ」と人は騒いでいたが、正直何が起こったのかイメージがつかめなかった。避難してきた 30 人に「とにかく炊き出しだ」と思った。集会場のプロパン、簡易水道は大丈夫だった。山間部だが、米を作っている農家が 4 軒あるので、そこから米を出してもらい炊き出しをした。隣の地区の避難所の分も作った。

道路が分断されたので山道を懐中電灯で照らしながら、男性が水とおにぎりを手持ちで運んだ。誰に何も言われなくても近隣の者は、有事の時には炊き出しを自発的にするのが習慣だ。山間部に暮らす者にとっては、山火事が起きた時の対処と同じで当然のこと。3 日間ほど集会場で炊き出しをしたが、4 日目から自衛隊などの支援が入ったので、炊き出し支援は終了とした。我が家には、親戚の人が 4 人避難していたし、隣家には 6 人が居た。周囲の家も避難してきた親戚・縁者を受け入れている家がほとんどだった。

山間部居住者は助け合いが当たり前

なんでも互いに助け合って暮らしている地域。男も女もみんな助け合うのが地域の伝統。嫁に来たら協力隊に入るのは当たり前だし、自然に馴染んでいくので疑問に思う風潮はない。地域には若い人も多数いる。婦防活動に対し「早めに連絡すれば、都合をつけて参加する」と言ってくれる。共同体意識は強い。私たちの地域在住者では、1 人が下に下りて亡くなった。

● コメント

「てんでんこ」とは、この地方の方言で「てんでんばらばらに・・・」との意味。津

波が来たら、親も子供に構わずに、真っ先に自分だけでも逃げろということであり、速い速度で津波が押し寄せてくる中で家族のことを心配して逃げ遅れ、一家全滅・地域消滅の危機とならぬよう「自分だけでも早く高台へと逃げろ」、そして「自分の命は自分で守れ」という昔からの伝承だ。また、自分自身は助かって家族や他者を助けられなかったとしても、それを非難しないのは不文律になっている。

「命てんでんこ」あるいは「津波てんでんこ」とも言う。明治 29 年に発生した「明治三陸海岸大津波」による津波被害の教訓として、三陸一帯で日常的に語り継がれている。

釜石市の「津波防災教育カリキュラム」には「てんでんこ」が盛り込まれ、津波から避難する時には、「地震が発生したらすぐに避難」「海から遠くでなく、高いところに逃げる」「一度逃げたら数時間はそこで待機する」を授業に導入している。

出席者は地域共同体の住民として、また協力隊リーダーとしての防災意識が高い。防災は「常に避難準備を怠らないこと」と語る。消防団員の夫や息子を支える妻・母としての思いの温かさ、そして家族全員が防災支援活動への使命感と自主防災意識が根付いている。協力隊では災害避難のために住民アンケートを計画中だった。

避難所では被災者に誠心誠意の支援を行ってきた。各自の適切で機敏な判断が支援活動を円滑に進めた。自身が家を流された被災者であるにも関わらず「書類は再発行できる、ものも買える。しかし、命の再発行はないし、買うこともできない」との発言は重い。

この地域は、家にカギをかける習慣がない。共助の精神が根付く地域コミュニティが形成されている。しかし、浜町周辺ではサラリーマン世帯の増加傾向があり、男性の地域離れが心配されている。

婦人防火クラブ（以下婦防）の課題は、実働会員の減少と高齢化、そして後継者継承・育成がある。婦防の保険担保期間は 18 歳から 75 歳までなので、それ以上の会員には保険が適応されない。高齢化による後継者問題は深刻だ。子どもたちは「やっぱり厚生年金がいい」とサラリーマンになる。街に住むことになり、地域から出て行く。跡継ぎがいても嫁が来ないなど、どの地域にも共通する都市化・過疎化・高齢化の課題を抱えている。

釜石駅へ向かう国道の風景は、ある境界線から一転する。商店街のガレキは片付いているものの、店のシャッターはゆがみ、ガラス窓は割れ、建物は変形している。インタビューは釜石市の河川敷にある仮設の釜石消防署で行われた。仮設テントに置かれた消防車には「大阪市消防局」と刻まれている。支援によるものだ。

立ちすくむしかないほどの多くの悲しみの中で気丈に「地域の防災力はイコール地域のコミュニティの力」と語る出席者の方々、貴重なお話をありがとうございました。

（インタビュー及び報告書作成：宮川智子）